倦怠感の正体

brades

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
倦怠感の正体

【Ｎコード】
Ｎ６４２３Ｔ

【作者名】
ｂｒａｄｅｓ

【あらすじ】
季節は梅雨。どうしようもない倦怠感い襲われ、俺は何もやる気が起きなかったんだ。ただ・・・その正体ってのがな・・・

運動不足な俺の倦怠感が、そのまま天気にも直接影響したかのような、そんな錯覚を覚えるほどのウザったるい梅雨の季節だった。

現在5月下旬。
ハルヒのとんちんかんな自己紹介から、早1年経つ。その間俺たちはとんでもないことに散々巻き込まれたもんだが、まあ、それは以前話した程度だ。察してくれ。
今日も雨が降り、ここの所の続いた雨によって市内探索ツアーも中止となっている。
この時期にもなれば、入学してきた1年坊たちも大人しくしていた4月に比べて本性を暴き出す頃合いなわけで、ざわざわとした学校の雰囲気に我ながら不快感たっぷりの溜息をつく。

「キョン、あんたねぇ・・・この数時間で何十回溜息ついてるのよ。そんなことじゃ、幸せが逃げるどころかリアルに皆気味悪がって逃げちゃうからよしなさい。」

「うるせぇ。こんな時期は俺は溜息が出るほど鬱々真っ盛りなんだ。梅雨なんて季節、無くなってしまえばいい。」

「全くあんたはバカね。昔の人は梅雨の季節に降る雨は大切に作った作物に対する恵みの雨として崇められていたのよ？」

こいつは何でこういうところは良識があるのかね？
いっそ俺達にもその良識だけを持って接してくれ。その方が俺は大喜びさ。

「当たり前のことしかできない奴はそれ以上にはなれないものなのよ！」

・・・だってさ。
よくわからんけども。

放課後である。
梅雨だろうと何だろうと部室でボードゲームくらいはできるからな。
古泉のオセロに付き合ってやるとしよう。
そう思って入った部室には、長門と古泉がすでに居座っていた。

「よう、お前らも暇だな。」

「・・・・・・。」

「暇であることは良いことですよ。実際、あの日から閉鎖空間は一度たりとも出ていません。僕も安心してここに来れるというわけです。」

古泉は薄気味悪い笑みを浮かべ、いつものごとくオセロを取り出す。
長門も長門で部屋に入ってきたときだけ顔を上げ、次の瞬間には読書に戻っている。確かに、こんな日常は俺の理想的なものなのかもな。

「何やらまた難しい顔をしておられるようですね。何かありましたか？」

唐突に古泉が俺の顔を近づけ少々心配そうにこちらを見つめてくる。

・・・気持ち悪いぞ、早く退け。

「いーや。この季節はどうも気怠くてやってられんだけだ。何もする気が起きないって言うかな？」

「それは、五月病とは違うのですか？あるいは何か気がかりなことでも？」

「何て言うかね。身体が重いんだよ。自分でも何が原因なのか全く見当がつかないんだが、身体を動かす気になれないんだ。」

そう話すと、古泉は一瞬驚いたような顔をして、含み笑いをしやがった。何だ、人が正直なことを述べてやったのに、それを鼻で笑うつもりか？

「いえいえ、とんでもありません。僕自身、貴方からの一定の信頼を得られたような気がして、率直に嬉しかっただけですよ。」

「なんだそりゃ。」

「それはさておき本題の方ですが、その気怠さの正体は僕にも解りかねます。ただ、もし貴方が涼宮さんの持つ一般的な方の思考パターンをお持ちであれば、わかる気はしますよ。」

そう言ってまた笑う。こいつ・・・何か楽しんでないか？

「それは・・・」

「お待たせっー！」

なんというタイミングで入ってきやがる。
ハルヒらしいと言えばハルヒらしいが、おかげで古泉の意見を聞き損ねたじゃねぇか。

「（あとでメールで送りますよ。）」

・・・近いぞ、古泉。

「あれ、みくるちゃんは？」

「朝比奈さんでしたら、今日は進路関係で来ることができないそうです。先程、こちらで報告を受けましたよ。」

なん・・・だと・・・？
麗しのＭｙエンジェル：朝比奈さんのお茶が飲めないのか・・・んーむ、残念だ。
まあ、朝比奈さんはもう高校３年。進路云々は大変だろうしな。

「ならとりあえず残っている全員、ただちに下校するわよ。」

「は？どうした？今日は休みにするのか？」

「あんたバカ？今台風がこっちに来てるのよ？」

・・・はい？
確かに今朝のニュースはろくに見ずに学校来てたんだが、台風？マジでか？

「そんなところで嘘ついてどうするのよ。さ、早く支度しなさい。」

そんなこんなで、古泉や長門とも別れ、ハルヒと下校中。

「やれやれ・・・。」

自然に溜息が出ちまうのは、もう仕様と思ってくれ。

「あんた・・・本当に大丈夫？」

案の定仕様なんてハルヒは知らず、怪訝そうな顔をしてくる。
そんなハルヒを見て、俺は何を思ったのだろう。

「なあハルヒ・・・今度の日曜は何かしないのか？」

そんな妄言を吐いていた。
我ながら言ってからしまったと思ったね。まるでハルヒに何か焚き付けているようなものじゃないか。

「・・・はぁ？何よいきなり？」

「いーや、最近特に部室でしか活動してないだろ。それに台風が来てるって言うならその後晴れるんじゃないかと思ってな。」

ハルヒは少し考えるような仕草を取り、やがて目を輝かさんばかりにきらっきらさせて俺を見る。
・・・ひょっとしたらコイツのこの顔見るのも久しぶりなんじゃなかろうか？

「キョン、あんたもたまには良いこと言うじゃない！団員としての自覚がようやく芽生えてきたのかしら？当然、晴れたら日曜日パトロールやるわよ！今度こそ何か見つけ出してやるわ！」

火を付けちまった。我ながら藪蛇だったな。

「いや、待て待て。まだ日曜晴れると決まったわけじゃないだろう。大体梅雨だぜ、今？」

「晴れるに決まってるじゃない！だって、やまない雨は無いんだからね！」

やれやれだ。どんだけ単純なんだよこいつは・・・。

だが、俺の気怠さもいつの間にか消えていた・・・。

そこへ、古泉のメールが届く。その中身を見て、思わずいつもの溜息が出た。だが、その溜息は少しいつものとは違っていた。

『貴方は最近の雨でＳＯＳ団・・・いや、もっと言ってしまえば涼宮さんとほとんど遊んでいません。貴方なりに寂しかったんでしょう、きっとね。』

この時から、俺は変わった。

〜Fin〜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6423t/

倦怠感の正体

2011年10月7日15時28分発行